

## はじめに

初めまして。

潜在意識を書き換える感謝ノート術代表の愛野高子と申します。

この本を手にとってくださりありがとうございます。

この本は2021年9月5日に開催した、私、愛野高子と、母であり、創業享保年間十四代日本家柴藤大女将である、柴藤滋子による、講演会「生きる」の内容を1冊の本にまとめたものです。

皆さんに質問です。

ある日突然、あと半年と余命を宣告されたときに、「夢はかなった」と言えますか？

「明日死んでも後悔はない」と言えますか？

実はこの言葉は、2か月前に、父が、残り半年の余命宣告を受けたときに言った言葉なのです。

私の実家は創業から300年続くうなぎ料理店。

両親はこの暖簾を守るために朝から晩まで働きづめ。私は物心ついたころから、そんな働く両親の記憶しかありません。

幼稚園の送迎はいつも最後。私を友人家に預けたまま、忘れて帰ってしまうということもありました。

それほどまでに両親は忙しさと、300年の暖簾を守ることに必死だったのだと思います。

私は3人きょうだいの年の離れた末っ子だったこともあり、いつも1人で留守番をしていました。

ある晩のこと。  
雨が激しく降っていました。

雷も鳴りはじめて、私は怖くなり、雷の音が聞こえな

いようテレビの音量を上げました。

両親の仕事が忙しいことはわかっていたし、家に帰ってこられないことはわかっていました。

でも、怖くて怖くて、私はたまたま母に電話をして、初めてこう言ったのです。

「お母さん帰ってきて」

泣きながら母にそう言いました。

もちろん、母が帰ってくることはありませんでした。すごく怖くて、悲しくて、つらかった思い出です。

月日を重ね、自分も子どもを産み育てる中、仕事をす  
るようになったころ、ある日保育園から電話がかかって  
きました。

保育園「けんちゃん（長男）が熱を出したのですが、お母さんお迎えお願いできますか？」

私「今からすぐに行けなくて……」

早く我が子のもとへ向かいたいのに向かえない。  
そのときに母のことを思い出しました。

あのとき、私は寂しかったけど、  
「帰ってきて」と泣いている子どものもとへ帰りたくても帰れない母は、もっともっとつらかったらろうと思います。

今回の講演会は、そんな母と私の、最初で最後の講演会です。

母は、私が2歳のときに余命を宣告されました。

まだ幼い子どもがいるのに余命を宣告された母。

でも、母は治療をしないこと選択し、一切の治療をし

はじめに

ないまま、がんと40年共存しているのです。

余命を宣告された父と母。

創業300年の暖簾を守るためにどのような思いで生きてきたか。

300年の歴史に裏打ちされた両親の生き方や考え方は、いつの時代でも共通する生き方の土台なのです。

本当の幸せは、いつも皆様の隣にあるのです。

この講演会を通して、皆様の日常がますます豊かな毎日となりますよう、心を込めて。

2021年9月吉日 愛野高子

※会話に出てくる治療方針や終末期については、専門家や主治医と話し合いを重ねております。必ず医師や専門家に適切な治療について相談してください。